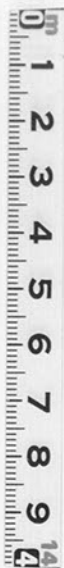




Roku

らっば
だいにしゅう
一九二九・ねん
September





目次

版画

表紙像

長瀬陸兵

版画

光りをもくろの悦を

猪狩澄江

詩

豆と明日

猪狩澄江

初秋

同 猪狩澄江

雲

同 猪狩澄江

無題

佐藤政一

雨風のなかに

長瀬陸兵

后記

長瀬陸兵



指持澄江

ふゆさぎ豆を
あんなに長く玄月たささぎ豆を
籠いつはいに持って来た

豆と明日

健んちやんの
あつかあは
腰巻まくつて
つゆいつはいの畑にはいつた

明日から村ではお盆だ
みんな腰巻をまくつて
明日の用意をしろ

ふゆ
ふゆ

そしていきいきした

褐色の玉の動いてのり
あを あを
あを あを

一めんの 草葉に
褐色の玉の動いてのり
ああでも空をあふけ
遠い空にはなんと黒目である
おい
手前の面うには
秋風が吹いてるいあないか
褐色の牛をみる
あんなに木つてきたらあないか

孫みたいに病めた大り
好箇川の板橋を横切った
朝だ

俺はひどく悲しくなつて
かすかに口笛ふいた
だが明日の東の空はまっ赤だ

せきれい

せきれいが鳴いてぬる
せきれいが鳴いてぬる

せきれいが
また鳴いてぬる
せきれいが
また鳴いてぬる



佐藤政實

雨云

夕陽の熱光を受けて
地平線の彼方に群らがつてゐる
雨云よ
その光鋒はあらゆるものを眞紅に
いたし
万物を焼かうとしてゐる

森を林を 田を家を

私がお前に向ふ時は
しらすしらす頭の下のを覚える
はりりした
ああ雨云よ
眞紅に燃え立つ 大自然よ

すべてのものは眩惑され
大地はいつそりと鳴りをいそめて
その魅力に酔ふてゐる

ああ
その神祕の敬馬具
ああ
その壯絶さよ
それはあたりそ
私達の行く手にやがてきたる
おほいなる甕醒の烽火だ

人生の平野にさまよう私のこころに
熱と力とを兵へてくれる雨云よ



拙本純一

無題

つるはしは握られたよみ
二足獣の肩にやろくやろく登りえた
空を固はさうの跡 星月夜に蒞これ
かつくり胸体の胸れた
それぞ
山床に鉦くりのこされた膝が不
眞黒い太陽をめぐり
山石をむしり
のめり
のめつて 裂け

のり下り無風の洞壁に肉を
はさし日月々々を断つたせる



長瀬陸兵

ぬれぎぬのうなひひき

暴風雨のなかにたたう

おれの生産
おれだけの 生産

その 無頼

暴風雨がやって来た
皆んな
この偉大な力の権威をどこに
迎へよう
砂塵を吹つとほし
ギマンを打ちださ
とつてもすはらしい音響は俺等の

進軍の喇叭だ

山はどす黒くうすくより
空野はかくれまのどよめきでいつ
はいた

灰色な氣雨云はうちのめされ
はつきりとした 明日が
俺等の頭上に現はれて来たんだ

起きろ
何を眠つてなんかぬるんだ
なんでも
君等の×ランコリックな睡眠が

續けられて行くものか
今や
君等は君等の進路を
はつきりと
つかまなくらあいけない

重たい敷物も
うすぺらな生活も そう
俺等の前にはない
皆んな
ワア
目覚め風雨のなかにたたう

右記

陸兵

俺等の誌嘲の方向が二歩一歩セン
明にされてゆくのがたまらなく愉快だ

こんな切な版画を思い切つて
載せてみた
なかにやまうたあないさ のびる
てりのびるんだ
版画に俺等は 新境を開拓しよう

金刃を注いだのだったか

またそんな粗末なもの出来上つ
てしまつた
だが
その裏面にはすいふたさう 陸兵が
つたんですよ 諸兄

同人は皆貧乏人だ
それに澄江が浪くしつまつた
嘲は非賣品だから切手さ
送つてくれはただで上げます

フオホの
繪はいいね
トルラアの詩は素朴だ
みもなく秋が来る
深い悲しみか 燃える燃える

非賣品
嘲の第二号
昭和四年九月十四日印刷発行
編輯人 長瀬陸兵
印刷人 長瀬陸兵
発行人 佐藤政次郎

同人 猪俣澄江
同人 佐藤政次郎
同人 長瀬陸兵
發行所
福岡県三井町旧城跡 佐藤政次郎
嘲の社

